

- 1 2 9. あなたのさとしは奇しく、それゆえ、私のたましいはそれを守ります。
- 1 3 0. みことばの戸が開くと、光が差し込み、わきまのない者に悟りを与えます。
- 1 3 1. 私は口を大きくあけて、あえぎました。あなたの仰せを愛したからです。
- 1 3 2. 御名を愛する者たちのためにあなたが決めておられるように、  
私に御顔を向け、私をあわれんでください。
- 1 3 3. あなたのみことばによって、私の歩みを確かにし、  
どんな罪にも私を支配させないでください。
- 1 3 4. 私を人のしいたげから贖い出し、私があなたの戒めを守れるようにしてください。
- 1 3 5. 御顔をあなたのしもべの上に照り輝かし、あなたのおきてを教えてください。
- 1 3 6. 私の目から涙が川のように流れます。  
彼らがあなたのみおしえを守らないからです。

## 説教

詩篇 119 篇は、8 節ずつからなる 22 の段落に分けられます。各段落は「アレフ א」 「ベット ב」 (英語で言うと A, B) という具合に、ヘブル語アルファベットの各文字が八つずつ見事に冒頭に並んで、各段落を「アレフ詩篇」「ベット詩篇」と呼びます。

全篇 176 節からなる詩篇で、最も壮大な長編ですが、主題は極めて明確で、中心テーマは神のことばです。神のことばが私たちの人生にいかにか決定的かが歌われます。それで各節の文には「みおしえ」、「さとし」、「戒め」、「おきて」、「仰せ」、「さばき」、「ことば」、「道」という言葉が、入れ替わり立ち替わりほぼ必ず使われて、私たちの人生に神のことばがどんなに大切かが強調されます。

129-136 節は「ב (ペー) 詩篇」と呼ばれ、各節の頭はすべて「口」の形をしたヘブル語文字「פ (P のこと)」で始まります。

「あなたのさとしは奇しく、それゆえ、私のたましいはそれを守ります。」(129) 「さとし」とは十戒のことです。「奇しい」という言葉は「人間の理解を超えている」という意味です。神がモーセを通して与えてくださった十の戒め「十戒」は、人知をはるかに越えた教えです。人間が考えもつかない、驚くべき教えです。多くの人は、自分の考えで生活します。世間の常識や人目ばかり気にして生活する人もいるでしょう。「知は力なり」の

近代合理主義は、人間の知性で検証できる以外は認めません。これに対して詩人は、十戒が人知の及ばぬほど高い教えだけれど、むしろそうだからこそ、「私のたましいはそれを守ります」と告白します。十戒はあまりに偉大なのです。それはいと高き神の教えです。人の理解を完全に超えています。ですから詩人がそれを守る時、それをすっかり理解した上で守るわけではありません。むしろほとんど理解できないままに守ります。理解できないのに守ります。

どうしてでしょうか。神は人より偉大だからです。愚かな人間よりもはるかに賢く偉大です。神に間違いはありません。神は完璧なお方です。いと高き、最も偉大な方です。神の「さとし」、すなわち十戒は「奇しい」のです。それで、詩人は「たましい」挙げて「それを守ります」。

**「みことばの戸が開くと、光が差し込み、わきまのない者に悟りを与えます。」**(130) 「わきまのない者」とは、良い意味でも悪い意味でも「(何でも信じてしまう)単純な者」のことです。悪い意味では「愚か者」、良い意味では「素直で純真な者」です。ですから、この直訳はこうなります。「あなたのことばの開かれることは、心素直な者を照らし、悟らせる。」詩人の告白通り、神のことばは闇を照らす光です。聞く耳のある者を照らし、悟らせます。

しかし、このことは、同時に「私は口を大きくあけて、あえぎました」との告白をもたらします。**「私は口を大きくあけて、あえぎました。あなたの仰せを愛したからです。」**(131) 「口」はこの「ペー詩篇」の「**口**」の意図するキーワードですが、神のことばが開かれ、神のことばに照らされて、正しく神を知ると、「私は口を大きくあけて、あえぎました」と詩人は言うのです。なぜなら、「あなたの教えを愛したからです」。「あえぐ」という言葉は「出産のうめき」、あるいは「飢え渴き、渴望」を意味します。いと高き神の教えである十戒、神のことばを聞いて、天の光を受け、神を正しく悟り知って、満ち足りたはずの詩人でしたが、しかし、それは同時に、新たな「渴望」に悩むこととなります。それは天上と地上とのギャップであり、天国とこの世とのギャップです。神の教えとこの世はあまりに違い過ぎるのです。まさに天と地ほどの違いがあります。そしてそれは、詩人の告白の通りに、「あなたの仰せを愛した」故の悩みです。神を正しく知る故の葛藤です。戦いです。義人の苦しみです。「仰せ」とは「神の権威ある命令」のことで、「愛する」という言葉は「願う、欲する」を意味します。神を正しく知った詩人が、神の命令を守り行おうとすればするほど、それがかなわぬ現実に打ちのめされます。それで、「口を大きくあけて」あえぎます。神の「仰せ」を愛すれば愛するほど、「口を大きくあけて」あえぐのです。そうなれば、詩人の希望はただ神だけです。

それでこう祈ります。「**御名を愛する者たちのためにあなたが決めておられるように、私に御顔を向け、私をあわれんでください。**」(132) 直訳はこうです。「あなたの名を愛する者たちのためのさばき(法律、裁判、判決、執行、判例)のように、私に振り向き、私を憐れんでください。」神を愛する者らのために、神は律法を与え、執行し、判例を残します。そうして、神を愛する者らが神の法に従って生きるよう導いてくださるので

す。神の助けがなければ、人は少しも神のみこころに沿った生き方ができません。すべては神のあわれみによります。神の助けが人の歩みを確かにします。

それで、詩人は祈ります。「あなたのみことばによって、私の歩みを確かにし、どんな罪にも私を支配させないでください。」(133) 直訳はこうです。「私の足(歩み)をあなたのことばの中で確立してください。そうすれば、一切の災い(罪、不正、欺き、虚無)に力を得させません(を許しません)。」王位や王国が「確立する」とは、周辺諸国の脅かしにも動じず、揺るぐことなく立ち続けることを意味します。そのように、周囲に動じず、揺るぐことなく、神のことばの通りに生きる時に、いかなる罪にも災いにも支配されることはない、そう詩人は告白します。

「私を人のしいたげから贖い出し、私があなたの戒めを守れるようにしてください。」(134) 「贖う」とは「身代金を払って身請けする」ことを意味します。神のみことばに従うと、世からの「しいたげ」にさらされます。その迫害に屈して棄教する誘惑は数えきれません。でも、それに打ち勝って、「私があなたの戒めを守れるようにしてください」と詩人は神に祈ります。身代金を払って「人のしいたげ」から救い出し、「私があなたの戒めを守れるようにしてください」と祈るのです。

「御顔をあなたの上のしもべの上に照り輝かし、あなたのおきてを教えてください。」(135) 「おきて」とは「刻まれたもの」のことで、「神の定め、命令」を意味します。直訳は「あなたの顔をあなたの上のしもべのうちに輝かせ、あなたの定めを教えてください」です。先には、「みことばが開かれること」が心素直な者を「照らす」と言いました(130)。その全く同じ表現を使って、今度は「あなたの顔を輝かせてくれ」と詩人は祈るのです。先には「みことば」が詩人を照らし、今度は「あなたの顔」、すなわち「神の顔」が詩人を照らすと表現します。そもそも「みことば」は神のことばなので、神ご自身が人に語りかけるものです。神の顔から神のことばが語られます。つまり、「あなたの顔をあなたの上のしもべのうちに輝かせ、あなたの定めを教えてください」と詩人がここで祈る時、それは、よりリアルに、より強烈に、顔と顔を突き合わせて、神の永遠の「定めを教えてください」と熱望していることとなります。「人のしいたげ」渦巻くこの世にあって、神の永遠の「定めを教えてください」と熱望します。揺るぐことなく、神のことばの通りに生きる人生を「確立する」なら、「いかなる罪にも災いにも支配」されずに、不動の人生を生きることができるのですから、神の永遠の「定めを教えてください」と一層熱望します。ただ冷たい文字として、字面だけ、ことばだけで、無機的に、機械的に学ぶのではなく、血の通った熱い「ことば」として、生きた神のことばとして、神が語られる、生の、リアルな、神ご自身のことばとして、面と向かって、真正面から、「あなたのおきてを教えてください」と詩人は祈るのです。これは、つらい「人のしいたげ」という状況に直面している詩人にとっては、一層切実な問題です。

それで、最後にこう祈ります。「私の目から涙が川のように流れます。彼らがあなたのみおしえを守らないからです。」(136) 「みおしえ」とは律法のことです。「みおしえ」を知らない人があまりに多く、それが詩人の

深い痛み・悲しみとなります。これもまた、神を正しく知る故の大きな「あえぎ」となります。この詩人の目から溢れ流れる「涙」は、神の律法を守らない異邦人を憐れむ「涙」では必ずしもないように思います。そのような記述、それをほのめかすような記述は、これまで見ることがなかったからです。単純に理解すると、神の律法を守らない者らが周囲に大勢いて、律法を守る神の民を「しいたげ」ています。だから、「目から涙が川のように流れ」ます。「口を大きくあけて、あえぎ」ます。何でこうなんだと、神の教えを渴望するのです。神の御顔を切実に慕い求めます。「神の律法を守らない」彼らに巻き込まれると、彼らの罪と共に災いにも巻き込まれてしまいます。その中で、神のことばは救いとなります。神のことばはあらゆる災いから救い出します。それはいのちの教えなのです。罪の世にあって、人の光であり、いのちのことばなのです。